



南国交通株式会社  
大口営業所長  
やまだ まこと  
山田 誠 さん

地域の公共交通は、高齢者や通学生利用者の多くは、高齢者や通学生です。時には、高齢者の世間話を聞くこともあり、市内では決してないお客さんとのコミュニケーションを図ることができます。

平成6年頃までは、どの路線も一般客や学生が多く、朝は満員の日々が続きましたが、今では、少子化と免許を持っている高齢者の層が多くなり、バスの利用者がだいぶ減りました。

自宅の玄関から病院まで車で送り迎えをする病院も多くなっています。バスの構造上、そういうことがなかなかできませんが、安心して利用してもらえよう安全第一で、運転をしています。たとえ、乗客が2〜3人であっても、バスに乗る方がいらっしゃるので、定時にしっかりバスを走らせています。

バスの利用者の多くは、高齢者や学生など、交通弱者と言われる方が多いです。バスが走らなくなったら、この方たちは、どうなるのだろうか、不安を覚えます。もっと地域の人たちにバスを利用していたとき、また、この町で、満員バスを走らせたいものです。

良が進み、バスの運行は、車掌と運転手の2人から、運転手だけのいわゆるワンマンバスに移り変わっていききました。この頃から、路線バスの廃止は始まってきているのではないのでしょうか。

昭和60年代は、大口から宮之城までの鉄道路線が廃止になり、人々の移動手段がバスに移行され、一時期は乗客者も多かったです。また、次期

に減ってきました。

**乗客は少なく、燃料費も上がり、苦しい経営を強いられる**

近年では、少子化が進み、乗客のほとんどが地域の高齢者です。高齢者も免許を持っている世代が多く、バスを利用する人の多くは、免許を持たない女性の方です。運賃については、平成7年に値上げをして以来、行っていないですが、乗客者も少ない中、燃料費も上がり、苦しい経営を強いられています。

また、近年のバス事業の規制緩和によって、事業の新規参入や赤字路線からの撤退が自由になり、公共交通機関として、これまで地域の足を

確保してきたバス事業者のおかれてある立場は、ますます苦しいものがあります。

**赤字路線を廃止せざるを得ない状況になってきているのは事実**

1台のバスを走らせるには、人件費、燃料費などを全て含めると、1キロあたり240円のコストがかかります。コミュニティバスについては、コストがかからないよう、運転手は契約社員です。私共も、経費を抑え、地域の足を確保するために、精一杯の努力をしています。一人でも多くバスを利用していただきたいものです。

地域を走る路線バスは公共交通機

関という立場もあり、利益追求型ではありませんが、利用者も少なく、このまま赤字が続くと、運行すること自体が厳しく、その体力もなくなつてきています。赤字路線を廃止せざるを得ない状況になってきているのは事実です。

**行政や地域と話し合い、よりよい方向を決めるのが会社の方針**

そうした中、紫尾・市野線と泊野線については、町へ廃止の意向を申し出ているところです。

80歳のおばあちゃんが、病院や買い物に行くためにバスに乗る姿を見ると、廃止は、本当に苦しく、できればしたくない作業です。地域の実情にあった交通をどうするのか、よく行政や地域と話し合い、今後の方向を決めていくのが会社の方針です。

私共は、公共交通としての経験やノウハウも持っていますので、よりよい地方交通策の手だてを皆さんと一緒に協議させていただければと考えています。

安心して利用できるよう  
**安全第一で、運転しています**

地方を走るバスは、市内を走るバスとは違って、乗客が限られています。どの停留所から誰が乗るといったことがわかります。

安全第一で、運転しています

地方を走るバスは、市内を走るバスとは違って、乗客が限られています。どの停留所から誰が乗るといったことがわかります。



南国交通株式会社 バス運転手  
まつむら かずひこ  
松村一彦 さん

バス乗客者が減ったからといって、簡単には廃止できない。バス事業者は、公共交通機関としての役割と、バス路線が置かれている立場の難しさがあるようです。

しかし、バス事業の経営は厳しく、南国交通バスでは、大口管内が年間8千2百万円の赤字、うち補助事業の生活路線を除く純粋な赤字分が6千4百万円、このうちさつま町分が3千万円。今回廃止対象の紫尾・市野線は3百万円の赤字、泊野線は5百万円の赤字。バス乗客者が減り、採算のとれない路線は、廃止を余儀なくされていきます。

インタビュー

町の公共交通の一角を担う路線バス。地域交通の現状について、南国交通株式会社大口営業所長の山田誠さんに話を聞きました。

乗客者も少なく、このまま赤字が続くと、運行すること自体が厳しい

**バス乗客者数のピークを迎えた昭和38年から昭和39年**

南国交通では、昭和25年頃から、さつま町の泊野線でバスを走らせていた記録があります。昭和38年から昭和39年にかけて、バス乗客者数は

ピークを迎えました。

昭和40年代に入ると、高度経済成長と共に、集団就職が始まり、都心に人々が移っていききました。そのため、地方では、乗客者が大きく減少しました。そうした中、道路の改

良が進み、バスの運行は、車掌と運転手の2人から、運転手だけのいわゆるワンマンバスに移り変わっていききました。この頃から、路線バスの廃止は始まってきているのではないのでしょうか。

昭和60年代は、大口から宮之城までの鉄道路線が廃止になり、人々の移動手段がバスに移行され、一時期は乗客者も多かったです。また、次期